

黄表紙に於ける表記法

一九自画作に於ける仮名遣い(2)

矢野 準

一

文字生活史記述の一環として、筆者は、先に一九自画作の黄表紙類十四作品(蔦屋板五作、榎本板三作など)を資料としてハ行四段動詞の語尾を表す仮名や形容詞の終止連体形を表す仮名、各々の音便形を表す仮名などの仮名遣いに関して調査を行なった¹⁾(以下、これを前稿と称す)。ここでは、まとめの一つとして「一九自画作黄表紙といひながら、板元別にいくらか仮名遣い面で差がありそうである。―特に、蔦屋板の諸作品と榎本板のそれとの違いが著しい。(後略)」と述べ、蔦屋板作品と榎本板のそれとの間に次の様な対蹠的相違が認められることなどを報告した。

1、ハ行四段活用動詞類の語尾〈ハ〉語形²⁾に関して

蔦屋板の作品では、比較的、「は」表記されやすく(「ハ」表記率:五八・九%)、榎本板の作品ではほとんど「わ」で表記されている(「ハ」表記率三・三%)。

2、ハ行四段活用動詞類の語尾〈ヒ〉語形に関して

蔦屋板の作品では「ひ」で表記されることが多い(「ヒ」表記率が八一・一%である)のに対し、榎本板の作品では対照的に「い」で表記されることが多く(「ヒ」表記率は四・六%であ

り)、〈ハ〉語形の場合と類似の、あるいはそれ以上にはっきりとした傾向が見られそうである。

3、形容詞の所謂終止連体形語尾〈イ〉語形に関して

ハ行四段動詞の場合同様、蔦屋板の諸作品では六対四の割合で「い」「ひ」両様の表記が混用されているのに対し、榎本板の諸作ではほとんど「い」表記といつてよい(「イ」表記率は九八・九%である)。

以上は、一部の活用語の語尾の表記に関する傾向であり、また、榎本板の作品数が少ない。そこで、今回は榎本板の作品を一つ増やし、「は」「わ」「い」「ひ」「の」の仮名について、仮名遣いの面から、取り上げ前稿の補いとした。

今回の調査では、前稿で取り上げた蔦屋刊行の五作品及び榎本刊行の三作品に榎本板の『垣覗本草盲目』を新たに加えた、以下に示す九作品を資料とし、本文部分の仮名遣いについて検討することにした。したがって、叙文を除く本文部分が調査対象となるが、できるだけ均質なものをと考へ、絵の一部としての文字部分や、漢字の振仮名は調査対象から除いた。なお、この九作品は一往、一九の自画作黄表紙とされるものである。

①『心学時計草』『上中下』寛政七(1795)年【時】②『新鑄小判贖』『上

中下」寛政七〇年【鑄】③『奇妙頂禮胎錫杖』「上中下」寛政七〇年【胎】④『怪談筆始』「上下」寛政八〇年【筆】⑤『化物小遣帳』「上下」寛政八〇年【遣】（以上五作品葛屋板）⑥『垣視本草草目』「上中下」寛政八〇年【垣】⑦『初登山手習方帖』「上中下」寛政八〇年【習】⑧『常盤國風土記』「上中下」寛政八〇年【常】⑨『尻擗御要領』「上中下」寛政一〇〇年【尻】（⑥⑦⑧⑨の四作品榎本吉兵衛板）

なお、テキストには、①③⑤の三作品は国立国会図書館蔵本写真
を、②④⑥⑧の四作品は『大徳急記念文庫所蔵江戸文學總瞰 三四
黄表紙（六）』（雄松堂フィルム出版）を、⑦は『江戸の戯作絵本
（四）末期黄表紙集』（一九八三・三、社会思想社刊）を、⑨は『大
東急記念文庫善本叢刊 近世篇5 黄表紙集』（一九七六・一一、
及古書院刊）を、各々使用した。なお、適宜、国立国会図書館蔵本
の写真や東北大学附属図書館狩野文庫蔵本コピーなどを参照した
また、各作品名の終わりの【】中に示した文字は作品の略号で
あり、以下の記述にあたっては、この略号をもって用例等を示すこ
とにする。なお、例文の所在は丁数で表示した。

二

本項では、「は」「わ」の仮名について述べることにする。

語頭の表記については、原則的には音と仮名とが対応しており、
あまり仮名遣いとして問題をもたないが、次に示すように、榎本板

表 I

板元 分類 作品記 巻	葛屋重三郎					小計	榎本吉兵衛					小計
	① 時	② 鑄	③ 胎	④ 筆	⑤ 遣		⑥ 垣	⑦ 習	⑧ 常	⑨ 尻		
	上中下	上中下	上中下	上下	上下		上中下	上中下	上中下	上中下		
語中尾	ハ	13 4 7	13 6 9	6 5 16	7 8 7 11	112	11 9 11	6 4 2	6 4 4	4 1 4	66	
	ワ	8 6 15	1 2 2	5 5 7	3 4 8 24	90	14 15 18	7 5 2	7 10 5	12 8 20	123	

表 II

板元 分類 作品記 巻	葛屋重三郎					小計	榎本吉兵衛					小計
	① 時	② 鑄	③ 胎	④ 筆	⑤ 遣		⑥ 垣	⑦ 習	⑧ 常	⑨ 尻		
	上中下	上中下	上中下	上下	上下		上中下	上中下	上中下	上中下		
字音語	ハ	1			1	2	1 2 1 1		1	1 1 1	9	
	ワ	1 4		3 1	6 12	27	3 1 1 1		1 1	1	9	
ハ四動	ハ	2 1 2	6 5 5	1 1 3 4	2 1	33	2 1 2		1		6	
	ワ	2 3 5	2 1 1	3 2 1 3		23	2 2 3 2	2 2 1 4 3	4 5 8		36	
その他	ハ	11 3 4	7 1 4	5 5 15	4 4 4 10	77	9 7 7 5 3 2	5 3 4	4 3		52	
	ワ	6 2 6	1 1	1 4 4	3 1 1 10	40	9 12 14 4 5	5 5 2	8 3 11		78	

で「カルワザ(軽業)」・「ヨワタリ(世渡り)」の二語について例外的に「は」表記が認められる。「よじろへいがかかるはざ」(習⑥ウ)、「人のよはたりはこのおきあがりこぼうしのごとく」(尻①ウ)。

語中尾の表記については、以下に述べる通りである。表Ⅰは、語中尾に於ける「は」「わ」の仮名の例数を自立語と付属語の別に作品毎に示したものである。付属語の場合は、鳶屋板・榎本板ともに、「は」表記で安定している。一方、自立語の場合は、この表によれば次の様なことがみてとれる。鳶屋板では「は」表記と「わ」表記とが両用されているが、相対的に「は」表記の方が多くなっている(「ハ」表記率五五・七%)。一方、榎本板でも両用はされているが、むしろ「わ」表記が多数を占めている(「ハ」表記率三五・四%)。もう少し詳しくみていくことにする。表Ⅱは、自立語に関して字音語と非字音語に分け、さらに後者をハ行四段活用動詞活用語尾の〈ハ〉語形とそれ以外に分ち作品毎に例数を示したものである。これによれば、字音語の表記と非字音語のそれとの間に差がみられる。

まず、字音語の表記についていえば、鳶屋板では「わ」の仮名の表記が主である(「ハ」表記率六・九%)が、榎本板では両表記五分五分である(「ハ」表記率五〇・〇%)。具体的に五十音順に示すと「インガ(因果)」1例(「ぐは」1常④)、「エイガ(榮華)」1例(「ぐわ」1常④)、「カイ(回)」2例(くわい1恒④・くはい1恒④)、「カイトイ(懐胎)」2例(くわい1恒④・くはい1恒④)、「カイチュウ(懐中)」1例(くわい1時①)、「カイブン(回

文)」1例(くわい1恒④)、「カイライシ(傀儡師)」1例

(くわい1胎④)、「カエン(火災)」1例(くわ1胎④)

「カシ(菓子)」3例(くは1習④・くわ1習④)

「カン(巻)」1例(くわん1恒④)、「カンオン(観音)」6例

(くはん1時④・くわん1時④・くわん1時④・くわん1時④)

「ケンカ(喧嘩)」9例(くは4時④恒④尻④・くわ5遣④常④)

「コウカイ(後悔)」2例(くわい2時④恒④)

「コウミン(荒神)」1例(くわう1遣④)、「コウミョウ(光明)」1例

(くわう1遣④)、「シカ(四花)」1例(くは1恒④)

「ジュンカン(循環)」1例(くわん1恒④)、「ハイカイ(徘徊)」1例(くわい1遣④)

「ヤカン(薬罐)」11例(くわん11遣④)

である。全て、所謂カ行合拗音相当の部分の表記である。近世初頭既に「くは」表記が見えているのであるが、鳶屋板の場合「ケンカ」がゆれている外は、伝統的な「くわ」表記が採られているといえる。

一方、非字音語の表記については、鳶屋板では「は」表記が過半数を占め(「ハ」表記率五五・四%)、榎本板では逆に「わ」表記が三分の二を占めている(「ハ」表記率三四・九%)。これは、概ね、前稿で示したハ行四段活用動詞〈ハ〉語形の表記傾向と一致する。しかし、ハ行四段活用動詞〈ハ〉語形の表記とその他のものを比べると、鳶屋板に於いては相対的にその他のものの「は」表記傾向が強く、榎本板に於いては、動詞〈ハ〉語形の「わ」表記傾向が特に強い。具体的に語を示そう。ハ行四段活用動詞〈ハ〉語形につ

ては、前稿でも触れたところもあり、ここでは今回調査作品として新たに取上げた『垣観本草盲目』の語を挙げるにとどめる。「は」表記は「カナウ」(Ⓔ⓪⓫⓬)・「モラウ」(Ⓔ)・「ヤシナウ」(⓫)の三語5例に対し「わ」表記は「イウ」(Ⓔ2⓪)・「クウ」(⓪⓫)・「ネガウ」(⓫)・「モラウ」(⓫)の四語7例であった。その他の語については、使用例が3例以上のものを中心に五十音順に挙げておこう。

「アラワス(現)」5例(は4||胎⓫3筆⓫⓬::わ1||遣⓫)
 「アラワル(現)」12例(は4||胎⓫遣⓫垣⓫2::わ8||遣⓫2垣⓫2習⓫2尻⓫2) 「アワス(合)」3例(わ3||垣⓫習⓫常⓫) 「マチアワス(待合)」1例(わ||垣⓫) 「アワセ(合)」4例(は4||鑄⓫胎⓫遣⓫垣⓫) 「ウチワ(団扇)」3例(は1||垣⓫::わ2||習⓫) 「カワ(皮)」5例(は4||時⓫鑄⓫胎⓫垣⓫::わ1||習⓫) 「カワ(川)」5例(は5||垣⓫常⓫2⓫2) 「カワリ(変)」2例(は2||習⓫常⓫) 「カワリ(替)」12例(は5||鑄⓫胎⓫筆⓫2常⓫::わ7||時⓫2胎⓫2筆⓫2習⓫常⓫) 「カワル(変)」9例(は3||時⓫垣⓫::わ6||筆⓫遣⓫2垣⓫尻⓫⓫) 「キワマル(極)」5例(は4||時⓫2垣⓫常⓫::わ1||時⓫) 「キワメ(極)」1例(わ||尻⓫) 「キワメテ(極)」2例(は2||鑄⓫習⓫) 「キワメル(極)」1例(は||胎⓫) 「クルワ(廓)」24例(は5||筆⓫垣⓫2常⓫尻⓫::わ19||胎⓫2筆⓫2垣⓫29||尻⓫2⓫3) 「クワエル(啞)」3例(わ3||時⓫胎⓫) 「コトワリ(断)」4例(は2||垣⓫習⓫::わ2||垣⓫2) 「コトワリ(理)」3例(わ3||時⓫垣⓫⓫) 「サイワイ(幸)」5例

(わ5||胎⓫遣⓫垣⓫習⓫) 「サワギ(騒)」7例(は5||時⓫鑄⓫胎⓫遣⓫垣⓫::わ2||尻⓫⓫) 「サワグ(騒)」1例(わ||常⓫) 「スナワチ(即)」3例(は3||鑄⓫遣⓫2) 「スワル(座)」6例(は1||尻⓫::わ5||尻⓫2⓫3) 「ツカワス(遣)」3例(は2||胎⓫筆⓫::わ1||垣⓫) 「ニワ(庭)」3例(は2||習⓫2::わ1||習⓫) 「ニワトリ(鶏)」1例(は||常⓫) 「マジワリ(交)」1例(わ||常⓫) 「マジワル(交)」3例(は2||遣⓫垣⓫::わ1||常⓫) 「マフシ(回)」4例(は2||時⓫常⓫::わ2||遣⓫2) 「マワス(回)」10例(は8||時⓫鑄⓫2遣⓫2垣⓫常⓫尻⓫::わ2||垣⓫尻⓫) 「マワリ(回)」4例(は3||鑄⓫遣⓫垣⓫::わ1||垣⓫) 「マワル(回)」9例(は5||時⓫鑄⓫胎⓫2習⓫::わ4||習⓫尻⓫2⓫) 「ミマワリ(見回)」1例(わ||垣⓫) 「ミマワル(見回)」1例(は||垣⓫) 「ヨシワラ(吉原)」15例(は15||時⓫⓫2胎⓫2筆⓫2遣⓫4||垣⓫⓫習⓫)

安定した表記を取るものは「ヨシワラ」ぐらいで、他は同一作品中でもゆれが大きい。「ヨシワラ(吉原)」は後部成素「原」の頭であり、当時も容易にハラ(原)と考えられたものと思われる。その点では、むしろ語頭に準じたものとして処理すべきであったか。

三

先項では、「は」「わ」の仮名について述べたが、この項では

「い」「ひ」「ゐ」の仮名に関して述べることにする。語頭の「ひ」表記については、原則的には音と仮名とが対応しており、仮名違いの問題が少ないと思われるため、語頭の仮名については「い」「ゐ」を、語中尾(付属語も含む)のそれについては「い」「ひ」「ゐ」を取り上げることとした。表Ⅲは、それぞれの仮名の例数を自立語の語頭・語中尾と付属語の別に作品毎に示したものである。また、表Ⅳは自立語の語中尾の仮名についてさらに細かく分類したものである。

表によれば、全体的には「い」表記が多数を占めており、既に、小松寿雄氏によって指摘された傾向と一致している。詳細にみると、葛屋板と榎本板との板元による違いや仮名の使用状況による違いなども認められる。「ゐ」「ひ」の仮名の側から検討してみよう。

1、「ゐ」の仮名について
葛屋板のみに認められ榎本板ではまったく使用されていない。また、使用される場合も付属語には用いられず、概ね、自立語の語頭を主に、特定の語に限り使用されているようである。

2、「ひ」の仮名の使用について
葛屋板での「ひ」の仮名の使用頻度に比して、榎本板のそれは非常に低い。また、両板ともに字音語の表記には使用されにくく、ハ行活用動詞(へヒ)語形で相対的に多く使用される。

「ゐ」の仮名については、葛屋板に認められるわずか30(語頭25、語中尾5)例で、「ひ」表記率は二・六(語頭四・七、語中尾〇・八)%である。左に、「ゐ」表記を含む語の例数について、葛屋板の他の表記の例数とともに示す。

表 Ⅲ

板元 作品 分類	表 記 卷	葛 屋 重 三 郎											榎 本 吉 兵 衛																
		① 時			② 籍			③ 胎			④ 筆		⑤ 遣		小計	⑥ 垣			⑦ 習			⑧ 常			⑨ 尻			小計	
		上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	下	上	下		上	中	下	上	中	下	上	中	下					
自 立 語	語頭	イ	41	48	56	44	50	30	28	46	45	16	38	33	33	508	51	52	45	43	35	40	35	37	29	44	43	52	506
	キ		3		5	3	2	1	5	1	1	1		3	25														
付 属 語	語中尾	イ	28	49	41	42	31	17	21	50	61	20	35	33	23	451	51	73	69	51	65	50	35	41	35	53	39	78	640
	ヒ		10	18	15	19	15	14	18	12	15	6	12	17	12	183	1	3	1	2		2		3		1			13
付 属 語	キ				2						2			1	5														
	イ		3	2		3		2						1	11	2	1	1	1	13	2		1		3	1		25	
	ヒ		2	3		2			1	1		3	1	1	14														

表の説明

この表の例数には、「イイ」などの場合の「いゝ」の表記のような繰り返し符号「ゝ」を用いた例なども含め、その際には繰り返し符号の直前の仮名、この場合には「い」の仮名、に準じた取扱いをした。また、「セイ(精)」などのような、長音を表す可能性のあるものは除外した。

「イル(居)」77例(ゐ—15||時③3④3鑄③3④2胎④④遣④2…
い—62||時③7④10④3鑄③3④8④7胎④④④9筆④④6遣④4
④2) 「イック(居)」1例(ゐ—1||鑄④) 「インウロウ
(居候)」1例(ゐ—1||遣④) 「インヨウ(陰陽)」4例(ゐ—
4||胎④3④④) 「インロウ(印籠)」2例(ゐ—2||時④2)
「レンイン(連印)」1例(ゐ—1||筆④) 「コウイ(高位)」1
例(ゐ—1||胎④) 以上、語頭の類

「キグライ(気位)」1例(ゐ—1||時④) 「クライ(位)」3例
(ゐ—2||時④遣④…ひ—1||時④) 「シバイ(芝居)」7例(ゐ—
1||筆④…い—6||時④筆④4④) 「トリイ(鳥居)」1例(ゐ—1
||筆④) 以上、語中尾の類

右の例では、全般的には、表記にゆれの見られる語が多く、ゆれて
いないものも例数が一例か二例であり「ゐ」表記で安定している
はいいにくい、「イル」の類の「ゐ」表記は伝統的な仮名遣いとい
え、小松氏によれば『浮世風呂』前編では「ゐ」表記で安定してお
り、「クライ」や「インロウ」についても『浮世風呂』前編や『商売
往来』に「ゐ」表記が認められるという。限られた語に集中してい
るが、少なくとも蔦屋板では伝統的な仮名遣いのおいをいくらか
残しているとはいえよう。また、語中尾の例としたものでも「シバ
イ」「トリイ」の場合は語構成要素としては語頭に準じて考えられ
そうである。

「ひ」の仮名については、表Ⅲによれば、蔦屋板で認められるも
のが197(自立語語中尾183、付属語14)例で、「ヒ」表記率二九・六
(自立語語中尾二八・五、付属語六〇・九%)であるのに対して、

榎本板では自立語語中尾に13例認められるにすぎず「ヒ」表記率も
二・〇%である。これをさらに表Ⅳによって詳しく見ることにしよ
う。

字音語に「ひ」の仮名が遣われにくいことは既に述べたが、蔦屋
板では156例中3例に「ひ」の仮名が遣われている(「ヒ」表記率二・
一%)。

「もとよりさくしやしたをニまひつゝつかふ男なれば」(胎④15ウ)

「これよりした一まひになれば」(胎④15ウ)

「もろこしふねとみへて中にこがねのかま一ッのりてゐたりけるが
しだひにくがのかたへながれよれば」(遣④3オ)

右の二語3例である。両語とも、蔦屋板では他には使用例なくこれ
だけでは「ひ」表記で安定していると速断はできない。榎本板には

「ひ」が遣われていないのであるから、両語とも当然「い」表記で
ある。

「きゃくもおのづといちまいぬぎニまいぬいで」(垣④8ウ)

「六十郎はうちにしりがおちつかぬほどかよいけるゆへしだいにそ
のしりのつまらぬみのうへとなり」(尻④11ウ) など

また、非字音語については、表Ⅳから次の様なことが見て取れる。
蔦屋板の場合、語群によって「ヒ」表記率の高下に幅が認められ
る。ハ行活用動詞の「ヒ」語形の場合には91例中77例が「ひ」の仮
名(「ヒ」表記率八四・六%)であるが、動詞イ音便形の場合には47
例中4例しか「ひ」の仮名が認められない(「ヒ」表記率八・五%)。

蔦屋板は、本来の表記をかなり反映しているように思われる仮名遣
いである。その意味ではハ行活用動詞から転成したと思われる名詞

類の「ヒ」表記率が比較的高いのもうなすける。そして、これは小松氏が『浮世風呂』前編の傾向として指摘した「ハ行四段活用語尾か否かで書き分けられる傾向」¹⁰と重なっている。一方、榎本板の場合は、ハ行活用動詞の「ヘヒ」語形の「ヒ」表記率が七%弱あるのが高率の方で後の語群では「ひ」が遣われなにか遣われても一、二%の低率である。榎本板では「書き分け」よりも、むしろ「い」の仮名への統一志向が存するかに思える。葛屋板で「ヒ」表記率が低率(六・二%)の「その他の名詞」の中で「ひ」表記された語について、榎本板での表記を見ても右の感じは否めない。

「コヨイ(今宵)」6例(ひ2 | 時①筆② | い4 || 常③ 2尻④ 2)

「ヤマイ(病)」14例(ひ3 || 鑄③ 3 | い11 || 垣④ 4 | ⑤ 2 | ⑥ 4尻⑦ ⑧)

なお、付属語に関しては、前稿の形容詞活用「ヘイ」語尾についての記述で若干触れたところもあり、今回は略す。

四

以上、前稿の補いとしては「は」「わ」「い」「ひ」「ゐ」字の違い方を中心に見てきたが、簡単にまとめると次の様になろう。

一 葛屋板の諸作品と榎本板のそれとの間での違いは、やはり認められ、前者が後者に比して伝統的表記の影響を残しており、後者はより仮名の整理が進んでいるようである。

二 字音語の仮名遣いは、葛屋板榎本板ともに、非字音語のそれに比してゆれが少なく相対的に安定しているようである。

具体例を示し足りないが、いもあるが、詳しい用例などは、今回

表 N

分類項目	板元	葛屋重三郎										榎本吉兵衛																	
		① 時		② 鑄		③ 胎		④ 筆		⑤ 遣		小計	⑥ 垣		⑦ 習		⑧ 常		⑨ 尻		小計								
		上	中	下	上	中	下	上	中	下	上		下	上	中	下	上	中	下	上		中	下						
字音語	イ	8	8	7	12	8	5	14	13	43	6	9	10	10	153	27	12	12	6	18	6	7	11	6	7	5	11	128	
	ヒ									2			1	3															
非字音語	動詞	ハ活用尾	イ		3	1	1					5	2	2	14	4	8	11	9	14	14	9	6	8	12	2	12	109	
		ヒ	4	8	4	8	2	7	9	7	5	1	4	10	8	77	1	1	1	2		1			2	8			
	イ音便形	イ	1	3	3	8	2	2	2	5	6	3	5	3	43	2	8	6		1	1	3	2		5	6	34		
		ヒ			2						1		1		4														
	その他	イ		1		1	2	3	1	1		2		2	13	2	2	1	1	3	2	1	2	1	2			17	
		ヒ																											
形容詞	活用	イ	5	7	9	6	10	3	2	8	3	2	8	6	4	73	4	13	12	11	8	10	8	6	4	7	7	12	102
		ヒ	2	7	5	2	9	2	1	1	3	2	3	3	40						1							1	
	その他	イ			1						1				2						1							1	
名詞	動詞から転成	イ	3	6	4	3	1		1	8	1	1	1	3	3	35	7	18	16	20	6	11	3	9	5	11	11	14	131
		ヒ	2	3	4	7	1	5	8	2	5	3	3	2	4	49	2								1				3
	形容詞から転成	イ	2												2	1		1										2	
		ヒ				2									2														
	その他	イ	8	24	14	10	7	2	15	7	6	7	5	1	106	5	10	9	3	13	5	6	3	7	8	8	19	96	
ヒ	2			3						1	1		7												1	1			
その他	イ	1			1	2		1				5		10	1	2		1	1	1	1	1	2	6	1	4	20		
(副詞等)	ヒ							1						1															

表の説明 分類項目の名詞部分の転成欄はハ行活用動詞や形容詞からの派生語などの例数。

取り上げなかった「う」「ふ」「お」「ほ」「を」や「四つがな」の仮名遣いなどとともに、別の機会にゆずることにしたい。

また、前稿で述べた課題、つまり「板下書きの問題、板元の指導力の問題、漢字の使用率や文字遣いの問題などを総合的に検討すること」等は残されたままである。全て、後致にまきたい。

注

- 1 拙稿「黄表紙に於ける表記法——一九自画作に於ける仮名遣い——」（『国語文字史の研究』一九九一、和泉書院刊行予定）。
- 2 所謂、動詞の未然形、連用形語尾、形容詞の終止連体形語尾に相当するものを「ハ」語形、「ヒ」語形、「ヘ」語形と仮称した。
- 3 当該例のうちで、「は」の仮名で表記される率を「ハ」表記率と呼ぶ。以下、これに準ず。
- 4 「」中に、所謂「見出し語形」を現代仮名遣いでカタカナ表記し、次いで、総語数を記し、さらに（ ）中にその内訳を示した。なお、見出し語には、語義の理解を助けるため通行の漢字表記を（ ）中に入れて付記した。また、内訳は各表記の例数の後に「『作品略号 数値』」の形で作品毎の用例数を示す。なお、作品略号の下に数値のないものは、用例数が1ということを表す。また、薦屋板と榎本板との判断を容易にすべく前者の作品に傍線を付した。以下、同様の場合がある。
- 5 坂梨隆三氏「曾根崎心中の「へは」と「わ」——その仮名遣と仮名の字体について——」（『茨城大学文学部紀要（人文学科論集）12』一九七九・三）38頁〜40頁など。
- 6 ①小松寿雄氏『江戸時代の国語 江戸語（国語学叢書⑦）』（一九八五・九、東京堂出版）での「江戸語の捉え方 五江戸語の表記」の項、②同氏「南畝咄本・浮世風呂の仮名遣補遺」（『国文目白25』一九八六・三）、③同氏「江戸語の仮名遣小考」（『還暦記念国語学論集』一九八六・三、明治書院刊）など。
- 7 八行四段活用や上二（一）段活用の動詞類をこう呼ぶことにする。

8 「イル」「クライ」については注6の①論考54頁〜55頁や②論考45頁下段〜46頁上段を、「インロウ」については、③論考384頁を、各々参照のこと。

9 前稿の表に比して転成した名詞の例が多くなっているが、前稿では「オモイツキ」などのような、かなり明確なそれに限定したためである。今回は、「アイカタ（相方）」1例（い1筆④）、「アイズ（合図）」2例（い2時④2）、「アイダナ（相店）」1例（い1遣④）、「アイテ（相手）」1例（い1時④）、「イサカイ（誦）」1例（ひ1遣④）、「シマイ（仕舞）」1例（い1時④）、「テアイ（手合）」6例（い6時④鑄④胎④2遣④2）等、かなり幅広く含めて数えてある。右は、一例として薦屋板に限定して示したものであるが、薦屋板でも「い」表記が多い。注6の②論考の言（47頁下段8〜9行）のごとく「ハに働く語という意識が薄かった」といえるのかもしれない。これらが含まれているために、結果として、「へは」表記率が五〇％程度と相対的に低くなっているわけである。

10 注6の①論考55頁2〜3行。

（一九九一年五月二〇日受理）